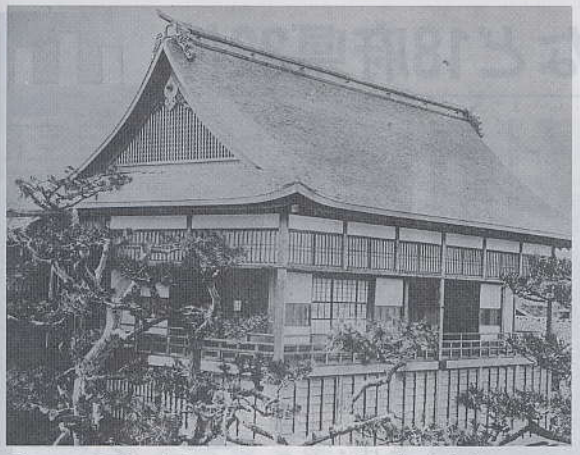
〈青森県史〉の窓 104

豪商 金木屋の栄枯盛衰

蔦谷大輔
（県民生活文化課 県史編さんグループ非常勤嘱託員）



①1881（明治14）年９月９日に明治天皇が宿泊した行在所。金木屋本宅の２階に建て増しされた。（青森県史編さん資料）

弘前市本町にある弘前大学附属病院の西側の角には、「明治天皇行在所御遺蹟」と銘のある石碑がある。1881（明治14）年、2度目の東北巡幸を挙行した明治天皇は、9月9日に弘前を訪れ、ここに建てられた新築の行在所に宿泊した。元々、この行在所は藩政時代から明治時代にかけて繁栄ぶりを見せた豪商金木屋一族の居宅であった。

金木屋は、本姓を櫛引（くしびき）、のちに武田と称し、南部領の出身で、中世末に津軽領に移転し北津軽郡の金木を本拠にしたという。その後一族は、苦難の道を歩みつつも本家と分家に分かれてそれぞれ商才を発揮した。

1780年代初め、本家の金木屋又三郎は屋号を山一（やまいち）と称して本町に質店を開き、一代で藩の御用達に任じられた。その後も亀甲町や賀田（よしだ）に店を構えるなど、手広く商いを行った一方で、俳人内海（うつみ）草披（そうひ）の門人になり、全国の俳人仲間と親交を持つなど、俳諧にも打ち込んでいた。又三郎が死去し息子の代になると、山一質店に衰退の兆しが見え始める。1829（文政12）年には御用達の御免を願い出て、認められた。それから、弘前の質店を売却して酒造店のある賀田へ引っ越した。経営状況はかつてほどではなかったが、全国各地の商人と築いたネットワークを活かして、全国の物価など流通・経済関連の情報のみならず、政治・社会情勢など、多種多様の情報を入手し、激動の時代を乗り切ろうとした。

一方、分家は1799（寛政11）年3月29日、金木屋甚左衛門が、絹布・木綿の掛け値なしの正札（しょうふだ）による現金売りの呉服店を本町に開店させた。屋号はカネキと称した。これは江戸日本橋の越後屋が始めた商売であり、当時としては画期的な商法であった。

1830～40年代の弘前藩内の主な商人をランク付（もちまるちょうじゃかがみ）「持丸長者鑑」という番付によると、本家金木屋又三郎は西の前頭九枚目に、分家の金木屋良七は西の関脇に位置しており、本家・分家ともに、藩の有力商人として名が知られていたことをうかがわせる。

明治時代に入り、金木屋呉服店は、「岩木川の水が枯れても金木屋の金は枯れることがない」といわれるほどの繁栄ぶりを見せたという。冒頭の天皇行在所も、分家の手によるものであった。しかしその後、新たな事業展開に成功しなかったことや、一族の不始末などにより呉服店は衰退していき、1904（明治37）年に閉店することになる。

閉店後、旧行在所は、同地周辺への病院建設によって、弘前市植田の橋雲寺へ寄進された。現在も同寺の護摩堂として残されている旧行在所には、金木屋一族の栄枯盛衰の記憶が凝縮されているといえよう。

②1830～40年代の「持丸長者鑑」
（『陸奥考古』第３号付録、青森県史編さん資料）